

2. どのようなときに熱中症を疑うか

2. どのようなときに熱中症を疑うか

非常に暑い環境下であって、表2-1に示す症状があれば熱中症をすぐに疑うことができます。しかし、このような典型例ばかりが熱中症ではありません。まず、熱中症の発生は、梅雨の合間に突然気温が上昇した日や梅雨明けの蒸し暑い日など、身体が暑さに慣れていない時に起こりやすいということを念頭に置いておく必要があります。図2-3は平成18年の例ですが、梅雨の中休みと梅雨明け後(盛夏)に症例の増加が見られます(とで示される症例数のピーク)。

環境因子

- ・ 気温が高い、湿度が高い
- ・ 風が弱い、日差しが強い
- ・ 照り返しが強い、輻射熱が強い
- ・ 急に暑くなった

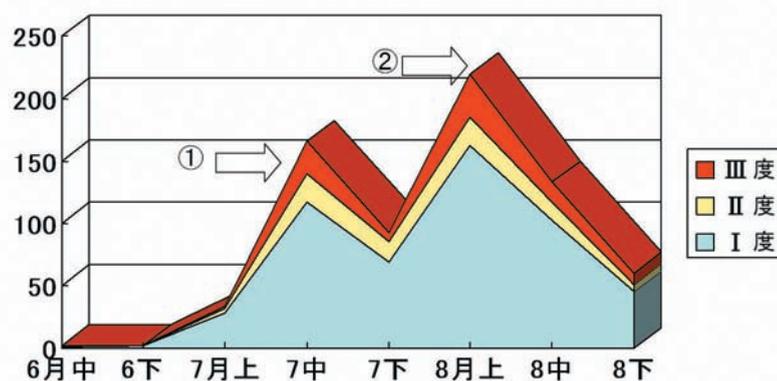


図2-3 平成18年における熱中症患者の旬別症例数の推移

(出典：平成19年、日本救急医学会)

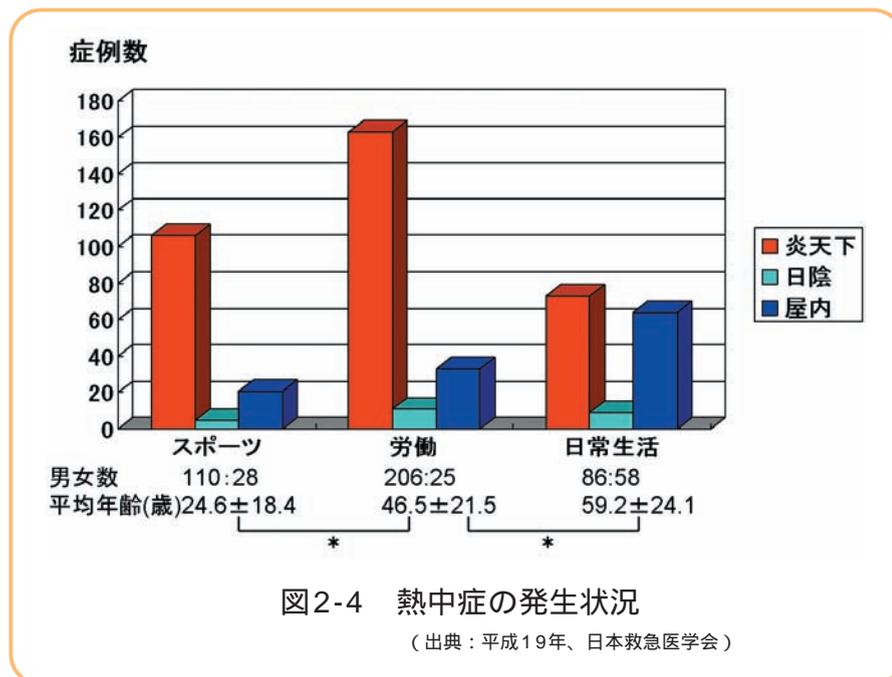
2. どのようなときに熱中症を疑うか

熱中症の危険信号として、次の症状が生じている場合には積極的に重症の熱中症を疑うべきでしょう。

熱中症の危険信号

- ・ 高い体温
- ・ 赤い・熱い・乾いた皮膚
(全く汗をかかない、触るととても熱い)
- ・ ズキンズキンとする頭痛
- ・ めまい、吐き気
- ・ 意識の障害
(応答が奇妙である、呼びかけに反応がないなど)

スポーツ時の熱中症の発生は若年者に多く、労働時では30歳代～50歳代で多く、主に炎天下で発生しています(図2-4)。日常生活では、散歩中、海、自転車乗車中、バス停でのバス待ちなどの屋外での発症のほかに、室内での家事、飲酒、店番などでも発症しています。高齢者では女性の発症が相対的に多くなります(図2-5の)。



2. どのようなときに熱中症を疑うか

